晩秋

牧野信一

青空文庫

一

僕はどうしても厭だ、と云つたが、みち子がどうしても行くんだ、と云つて承知しない。何故僕が強情を張るか、その理由はちよつと……云ひにくいこともないけれど、云つたつて仕様がないから、云はない。

「無性(ぶしやう)！　無性！　無性屋さん……」と叫んだかと思ふと、いきなりみち子は僕の背中をドンと打つた。

僕はウーンと仰山なうめき声を発して死んだ真似をした。——さうしてみち子に悟られないやうに、薄く眼を開いて見たら、もうみち子の眼眦には涙が溜つてゐた。何といふ泣き虫な子だらう、僕は苦々しく思つた。少し可哀さうなやうな気もしないでもなかつたが、一体僕は同情心が深過ぎる性質で、その性質を自分でよく知つてゐたから、これツぱかりのことでまたそんな心を起してはよくない、教育の為に宜しくない——などゝ気が附いたので、黙つてゐた。

「ようツてエば……」

「ようとは何だ。あんまり甘えるな。」

僕は起き上つて、厳然と坐り直つて、みち子の顔をウンと睨めた。——みち子は、急に僕が態度を改めたのでびつくりして、キヨトンと僕の顔を視詰めた。

「何だ！　ひとが黙つてゐると思つていゝ気になつて……」

みち子は、何とも形容の出来ない変な顔をして、尚も凝と僕の顔を見てゐる。少しく危いぞ、と思つたが、かういふところが大事なところだ、決して機嫌など取つてはならない――。

「その顔は何だ。怒りさへすればいゝと思つて。」

之だけいつたら何とか返事があるだらうと思つたが、みち子は決して口を開かぬ。僕も少々焦れ度くなつて、

「知らないツと！」

横を向いて、机の上の本に眼を落して了つた。

それと同時にみち子はムツクリと立ち上つた。さうして物をも云はず足音荒く僕の室を出て行つた。そら始つた――と僕は思つた。然しかうなると僕も少々気になり始めたので、机の前を離れてそつと階段の降り口に忍び寄り、階下の様子を窺つた。

「泣いてゐちや解らないぢやないか、ええ？　お前はほんとに泣き虫だよ、だから兄さんにからかはれるんだよ。」

「……」

「どうしたツてえのさ、えゝ？」

「兄さんの嘘吐き！」

突然みち子はシヤクリあげて、叫んだ。

「どんな約束をしたの？　お母さんに云つて御覧――」

それから稍暫くみち子は泣きじやくつてゐたが、漸くそれが収まると、次のやうなことを言ひ付けてゐた。

それはもう十日も前に約束したことで、明日の日曜日に江之島へ行く筈になつてゐた。ほんとならこの前の日曜日に行くところだつたのが、その時になると「憎むべき兄」は突然急用が出来て、友達の家へ行つて夜おそく帰つた。その時も違約のことを攻めたら「この次には確だ。」と堅く云つてゐた。

ところがいよ〳〵今日になると、「急に頭が痛くなつて来た、どうも近頃神経衰弱らしい。」と云ふ。「そんな都合のいゝ神経衰弱があるものですか。出掛けるのがそんなに億劫で厭なのなら、始めつから約束なんてしないがいゝ。約束をしたから待つてゐたのです。」余り癪にさはつたから「そんな出たら目の虚病なんか、汽車に乗れば直ぐに治つて了ふ。――なアんだ、男らしくもない。」と云つてやつたら、真赤な顔をして「馬鹿！」と怒鳴つた。もう我儘が出来なくなつて夢中になつて背中を打つた。

「あたり前よ。」とみち子は云つた。

「それは兄さんがよくないね。」とみち子の母はみち子に加勢した。

「だけどお前もいゝとは云へないよ。どうもお前はお転婆でいけない、仮りにも兄さんを打つなんて――」

「だつてもう口惜くつて堪らないんですもの。」
「二人ともいけない。」
「よう、お母さん。」
「何をね……」
こゝまで僕は聴いた。それから僕は慌てゝ机の前に戻つて、本の上に眼を落してゐた。
僕が予期した通り母が僕の室に入つて来た。
「勉強？　頭が痛いツて、どう？」
「えゝ、今朝から痛いんです。」
「余り勉強し過ぎてもよくないよ。明日は日曜だから、朝早くおきて一日どこかへ散歩にでも行つて来たら？」
「僕、遠足はきらひなんですもの。」
「だから頭が痛いんだよ。稀には郊外の方へでも行つていらつしやいなね。」

二

いよいよ江之島へ行くことになつて了つた。みち子と二人きりでは我慢が出来さうもないので、友達の岡村に電話をかけて「一緒に行かないか。」と云つた。丁度岡村も弟の正ちやんを

伴れて何処かへ行く義務を負はされて弱つてゐたところださうだ。と「不思議にも同じ運命の許にあつた二人は、これでいくらか助かつた。」と云つて、二人は笑つた。岡村が行くのなら僕も面白い。朝七時に新橋で会ふ事に定めた。

「兄さん写真機は持つて行かないの?」

すつかり機嫌をなほしたみち子は、そんなことを僕に注意した。

「そんなものいらないよ。」

「何故?」

「あんなものをブラさげて歩くのは大嫌ひなんだ。——それに岡村が持つて行くだらうから、それで沢山だよ。」

「私達も持つて行つた方がいゝぢやないの?」

「まア、いゝよ。」

僕は、何か手に持つて歩くのが煩いので、ステツキすら持たずに、たゞ両手をブラブラと振りながら出掛けた。

「みち子さん暫く見ないうちに随分大きくなりましたね。すつかり姉さんになつて了つたな!」

岡村がこんなお世辞を云ふと、みち子はホヽヽヽと笑つた。僕は、そつとみち子の済した横顔を眺めると、前日の騒動を思ひ出して、もう少しのところで失笑するところだつた。

汽車は既に「大船」を過ぎてゐた。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第一巻」筑摩書房
　2002（平成14）年8月20日初版第1刷
底本の親本：「少女　第一〇八号（時雨の巻　十二月号）」時事新報社
　1921（大正10）年11月8日発行
初出：「少女　第一〇八号（時雨の巻　十二月号）」時事新報社
　1921（大正10）年11月8日発行
入力：宮元淳一
校正：門田裕志
2011年3月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

晩秋

牧野信一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/